

家庭科で学ぶSDGs

～映像内容と指導・支援のポイント【教師用】～

映像の項目・内容	指導・支援の内容、ポイント
オープニング <ul style="list-style-type: none"> ●持続可能な社会とは ●SDGsの目標、ターゲット、指標 ●日本の課題 	<ul style="list-style-type: none"> ○近年「SDGs」については報道や各学校段階の様々な教科書でも取り上げられ、生徒のほとんどが耳にしたことのあるキーワードだと思われる。「SDGsとは何か？」や「SDGsの具体的な目標で知っているものがあるか？」などを問いかけてから映像を再生するなどして、生徒が課題を持って映像を視聴できるようにしたい。 ○SDGs（エスディーゼーズ：Sustainable Development Goals「持続可能な開発目標」の略称）は、2015年の国連のサミットで採択された2016年～2030年までの国際的な目標である。「持続可能な社会」を目指すために17の目標（Goal）、そしてその目標に紐づけられた具体的な行動目標や期限を示す169のターゲット、その成果をはかるための232の「指標」で構成されている。SDGsは、行政、企業、そして個人が一体となって取り組むべきものであることを押さえておきたい。 ○映像中の日本の「真っ先に解決しなければならない最大の課題」のところでも一時停止をするなどして、「ジェンダー平等」や「気候変動への具体的な対策」などについて着目させたい。
気候変動対策の視点からの食 <ul style="list-style-type: none"> ●温室効果ガス（二酸化炭素） ●フード・マイレージ ●地産地消 	<ul style="list-style-type: none"> ○このチャプターでは、気候変動への対策を「食生活」と関連付けて考えていくが、映像視聴前に「気候変動」と「食生活」にどのような関係があるかを生徒同士で話し合わせるなどして関心を高めたい。 ○ここでは「フード・マイレージ」に着目する。「フード・マイレージ」とは、食料の輸送量に輸送距離を掛け合わせた指標で、単位は「t・km（トン・キロメートル）」で表示する。「フード・マイレージ」というと、海外からの輸送にばかり目が行きがちではあるが、国内の生産地も大都市からはなれたところであることがほとんどであり、特にモータリゼーションによって大型トラックでの輸送が中心になってからは、食品の輸送に多くの化石燃料が使われていることを押さえておきたい。 ○この「フード・マイレージ」の値を下げる試みとして、本映像教材では「地産地消」をひとつの案として提示している。「地産地消」とは、地域で生産された農林水産物を地域で消費しようとする取り組みのことで、直売所での販売や、学校給食での地元食材の積極的な利用などを通して、生産者と消費者の結びつきを強化し、地域の活性化につなげようというものである（農林水産省「地産地消の推進について」）。地産地消では、食料の輸送距離が短くなるため、流通コストが削減できるだけでなく、二酸化炭素の排出量が少なくなり、環境への負荷も軽減できる。また、消費者と生産者との物理的な距離が近くなるだけでなく、直売所などで「〇〇さんのところのトマトが今日は売っているかな」と探すなど、消費者にとっては“顔の見える生産者”から新鮮な食材を手に入れられ、心理的な距離が近くなることも紹介したい。
ジェンダー平等 <ul style="list-style-type: none"> ●ジェンダーとは ●ジェンダー平等でない事例 ●ジェンダーギャップ指数（日本の男女間の格差や意識の問題） ●男性の子育て参加（佐賀県の片桐さんの例） ●子育て世代を支える取り組み（大学内に設置された保育園） 	<ul style="list-style-type: none"> ○ジェンダー（gender）とは、生物学的な性別（sex）に対して、社会的・文化的につくられた性別のことを指す。 ○映像では、アフリカ・ケニアで学校に通えていない女子生徒がいることや、日本の大学合格者数の男女間の意図的な差があったことを紹介したが、世界・日本国内にその他の課題は無いのか、生徒自身に考えさせたい。 ○日本では、時代とともに家族形態が変化したり、価値観が変わったりしており、現在でも家族に関する法律を巡っては様々な議論がされている。たとえば、旧民法では家制度があり、結婚は夫の家を存続させるためのもので夫婦の権利と義務が平等ではなかったことや、1947年に現行民法に変わり『夫又は妻の氏を称する、夫婦は同居し、互いに協力し扶助しなければならない』と変わったこと、また婚外子の相続は婚内子の2分の1であったことに違憲判決（2013年）が出たこと、女性の再婚禁止期間が6か月から100日に短縮（2016年）されたこと、「選択的夫婦別姓」をめぐる議論が続けられていることなどが挙げられる。 ○社会的な側面や政治的な側面だけでなく、「小学校の時のランドセルの色は？」「子どもの頃の遊びは？」「トイレの入口のマークの男女の色は？」など、身近なところにも目を向けさせながら、ジェンダーについて考えさせたい。
安全な水 <ul style="list-style-type: none"> ●安全な水とトイレを世界中に ●世界の子どもや女性たちによる水汲みの現状 ●カンボジアでの北九州市の取り組み ●日本の企業の取り組み ●世界の人口の増加と水不足 	<ul style="list-style-type: none"> ○日本では、蛇口をひねるとすぐに安全に飲める水が出てくることや、駅や学校には綺麗に整備されたトイレが設置されていることから、「水」について自分の課題だと感じない生徒が少なくないかもしれない。しかし、世界的にみると安全に管理された水を利用できる人の割合は74%、安全に管理されたトイレを利用できる人の割合は54%、せっけん和水を備えた手洗いを利用できる人の割合は71%である。新型コロナウイルス感染症の予防にはせっけんを使ったこまめな手洗いが効果的だと言われている中、約30%の人々がそれを行うことができないということなどに着目させたい。 ○カンボジアの首都プノンペンには、かつては浄水システムが整備されていなかったが、現在では北九州市上下水道局の協力で、安全な水を供給できるようになっている。北九州市は、かつて大工業地帯として経済発展を遂げた一方で、大気汚染や工場排水による水質汚濁などの公害に苦しんだ。しかし、市、市民、企業、大学など研究機関が協力して、綺麗な川や海を取り戻し、その実績と技術の積み重ねにより、OECDから「SDGs実現に向けた世界のモデル都市」に選出されている。 ○大阪の企業（日本ポリグル）では納豆の成分に着目した技術を活用し、様々な開発途上で「安全に飲める水」を提供している。中学生・高校生にとっては「自分にできること」を考えることがもちろん大事であるが、北九州市や企業の事例は、世界的なSDGsの達成のために、日本から積極的に働きかけている例として紹介するとよい。 ○世界の人口増加や、日本でも少なからず少雨による水不足や取水制限も見られるようになってきていることから、「節水」についても押さえておく。ここでは熊本市立藤園中学校、甲佐町立甲佐中学校、山鹿市立鹿本中学校の取り組みを紹介した。自分たちの学校や家庭ではどんな活動ができるか、班で話し合うなどしてアイデアを発表させたい。
エンディング <ul style="list-style-type: none"> ●茨城県立竹園高校の「SDGsカルタ」 	<ul style="list-style-type: none"> ○茨城県立竹園高校の女子生徒の「自分が行動することで誰かを変えることができる、誰かが行動してくれる、変化も与えられる」というコメントは、今の中学生や高校生がSDGsに取り組んでいく上で非常に示唆的なものである。映像視聴後には、それぞれの学校で、「自分たちはどんなことに取り組むことができるだろうか」ということを考えてみてほしい。